

孝子 善重と与重兄弟

那珂市歴史民俗資料館



水戸藩では、領民たちに善行を勧めるために、日頃から勤労意欲に満ちた者や親孝行な子どもや女手ひとつで子育てに励む者など評判の者たちを、それぞれの地域から報告させまとめました。その一つが側用人小宮山昌秀（楓軒）の著した『旌表録』です。その中に、那珂市後台野中に住んでいた善重と与重兄弟が載っています。

後台村の農夫理兵衛には、長男善重と次男与重の二人の兄弟がいました。兄弟は両親の教えをよく守り、苦勞をいとわず熱心に仕事に励みました。また、周囲の人々との交流にも積極的でした。家族揃ってよく働きましたが、暮らし向きはなかなか良くなりませんでした。天明3年(1783)前後には、全国的に冷害となり飢饉が広がりました。そのような中、兄弟は、自分たちの生活が苦しいにもかかわらず村人の救済にも力を尽くしました。

隣村の人が、理兵衛宅の貧しさを憐れみ、与重に「他家へ養子に出てはどうか」と勧めました。しかし、与重は「吾が村の住民はもともと4～5軒と少ない。しかも、自分がここを出て他家を継ぐことは、父の本意ではない。自分も父の元を離れる気持ちはない。」と断り、近くに粗末な小屋を建てて住んでいました。兄善重は、田を分けて譲り与えようとしたましたが、弟与重は、兄の田畑の少ないのを知っており受けません。事はなかなか決しませんでした。

この親子の美しい情愛が郡奉行に聞こえ、天明8年(1788)7月父子三人が藩から表彰されました。父の理兵衛が67歳、善重35歳、与重31歳の年でした。その後、寛政2年(1790)に父の理兵衛は病死しましたが、この年の12月、6代藩主徳川治保が瑞龍山へ墓参りの途中に二人を召し寄せ、改めて銭若干を与えて賞しました。

家族・家庭の崩壊が指摘され、福祉の充実が叫ばれる今日、考えさせられるところです。

この碑の題字「錫類」（子孫に善行を広めること）は県知事の力石雄一郎、書は那珂郡長の丹誠（先祖の丹梅子は藤田幽谷の夫人）で、大正7年(1918)5月に建てられたものです。（碑は県立水戸農業高等学校の東方、野中地区にあります。）

